

成果を見つめる 未来を見つめる



ベトナムのハノイに留学中の福田忠弘運営委員が徐々に新潟に帰ってきました。先日のNVC総会で、定例の議事後に現地の様子を生々しくレポート。
累々と積み上げてきたベトナム未来プロジェクト(VFP)も32もの事業を数えるまでになっています。

VFP25: ホーチミン市郊外、アンフードン村の小学校

CONTENTS.....

多賀秀敏代表講話

「NVCの第二世代へ」 2

2002年度NVC総会レポート 8

第29回地球を知る講座 「新潟からのNGO活動」

～ベトナム未来プロジェクトのこれまでとこれから～

福田忠弘運営委員 12

Hot News 16

NVCと総合的な学習の時間 関 洋介 前野春樹 馬場隆史

東アフリカ事業 = ケニア = と36thスタディーツアーのお知らせ 峯村康明

リレー・トーク ～ NVC's Human Network ～ 18

金子洋二さん / 宮崎増次さん / 幾見泰宗さん / 斎藤恭子さん

事務局だより 20

NVCの第2世代へ向けて

NVC代表に再選されて

2002年4月7日のNVC総会で、代表に再選されました。もとより1年間だけピンチヒッターのつもりで「代表代行」程度の気持ちで昨年お引き受けしたのですが、「代表は2期が慣例になっている」「次の方の準備が整っていない」など説得されました。幸い、1期目も皆様のお蔭で、何もしなくともつとまる代表でした。その上、代表が何もしないと、NVCは着実に発展します。同じ方針でのぞみます。私の任期は、移行期間ととらえております。「第一世代のNVC」から「第2世代へのNVC」です。

第二次大戦後の紛争で5000万もの命が奪われている

それをご説明するのに、少しお時間を頂きます。少し迂遠な話から始めるのをお寛し下さい。私事で恐縮ですが、私、20代後半の博士課程の頃から、高校「政治経済」「現代社会」の教科書を書いております。教科書は、文科省の検定を通らなければなりません。最近システムが少し変わりました。本質的には同じです。今年も私の執筆箇所が、一か所引っかけました。マダガスカルへ出かける直前の慌ただしい時期に、図書館通いをして50冊くらいの本と首っ引きになりました。

それは「戦後だけで三千万人もの人々が戦争で命を落とした」というフレーズです。文科省の検定官は、出典を示せというのです。証拠を出せというわけです。かつても一度このフレーズが問題にされました。SIPRI(ストックホルム国際問題研究所)が発行しているSIPRI年鑑にその数字がでていたのでOKとなった経緯があったので気楽に考えていましたところ、今回は探せども探せどもその箇所がでてこない。そこで仕方なく、冒頭に申し上げたように戦争と犠牲者の数に言及している書籍を50冊くらい、調べ挙げて積み上げ方式で、三千万という数値を出しました。幸い検定はとまりました。

ところが、去年の6月にスウェ



ーデンのウブサラで開催された Conference on Data Collection in Armed Conflict (武力紛争データ収集会議)に提出された論文を最近になってまたま入手する機会がありまして、がく然としました。「1992年に発行されたもので1945-1990年まででおよそ4000万人となっているが、(中略)2000年までをカバーすると死者の合計は5000-5100万人に増大している」(Milton Leitenberg, 'Deaths in Wars and Conflicts Between 1945 and 2000,' p.1.)とあるのです。この論文は非常に丹念な計算を行っています。とても丁寧に作られています。いずれにしても、まずこの数字を覚えておいて下さい。

資源の有限性

最近開発の分野で強調されるのは、紛争と開発との関係です。開発がうまくいかないから貧困が解決されない。紛争が開発を阻んでいる。貧困が紛争を生み出すという悪循環です。しかも、貧困こそうまくいかない開発や環境の悪化の原因だということです。環境問題に関しては、そもそもRome Club(『成長の限界』1972年)が、資源が有限であって使い切ってしまうと、石油でも、ガスでも、鉄でもなくなってしまうのだということを発表した報告書があります。資源に対する認識は無限の地球から有限の地球へと革命的な変化を遂げたのです。このころから世界中の人間がしっかりと認識している問題のはずです。実は、有限ではないが、決まった一定量が元の形に戻るスピードが、消費、すなわち物質の変形に追い付かないというのが真

実です。丁度 Only One Earth (たったひとつの地球：かけがえない地球)とか Spaceship the Earth (宇宙船地球号)という発想がでてきたのと軌を一にしています。空気や水すらこの有限物質リストに載りつつあります。ひとたび汚染してしまうと(変形)、自然に元に戻る(復原)には気の遠くなるような時間がかかります。変形力が復原力を上回ったのです。あるいは、変形量が、

復原能力を上回ったのです。

BHNの充足

ご承知のように、開発は今第四世代までできています。第一世代は、近代化論です。工業化=西欧化=近代化で、資本を投下していけばどんな国も「資本主義的に」発展していくというお気楽路線です。ちょうど冷戦の時期にアメリカからでてきた発想です。

第二世代は、いやいや、やはりもっとも貧しい人々のBHN(Basic Human Needs:基本的人間必要)の充足が緊急かつ不可欠であるという主張です。その後、第三世代(一方で、持続可能な開発、他方で、精神的・文化的要素を含めたBHNの充足)へ移り、今、第四世代が生まれようとしています。私は、開発論をこんな風にとらえています。私の考えでは、この問題は、ローマクラブレポート+第二世代で解答はできているという立場です。

BHN(Basic Human Needs:人間として生きる上での最低限の必要)とは、外部に依存するか内発的に充足するかは別として、一般的に：食糧、屋根のある家、衣料、初等教育、最低限の保健施設、所得を得る途としての雇用がみだされることとしていきます。それを外からやるか自分たちでやるかによって、内発的發展論という考え方ができます。ダグ・ハマースホルド財団が、1977年に刊行したAnother Development(『もう一つの発展』)では、(1)人々が生きるのに必要とする衣食住、健康、教育などの基本的ニーズの充足、(2)地域の人々が助け合いながら実現する自立、(3)地域の生態系との調和、(4)参加による既存の社会経済構造の変革の必要、をあげています。これは内発的な発展論の例にちかいです。

ちなみに第4世代は、所得貧困(1日1ドルの絶対貧困ライン)ばかりでなく人間貧困(生存余命、知識、識字、生活水準、保健医療、安全な水、宗教の自由etc.)をも問題にして、一人一人に力をつける empowerment が強調されます。それをもとに社会開発を目標にして社会参加を呼びかけます。

図1 環境・人口・貧困の相互関係

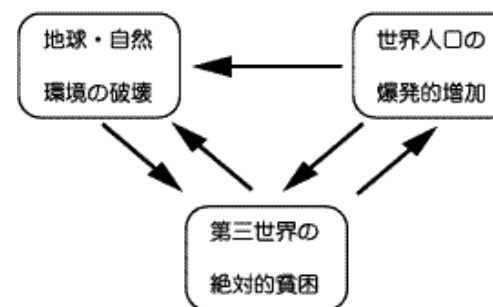


図2 環境の悪化・貧困・紛争

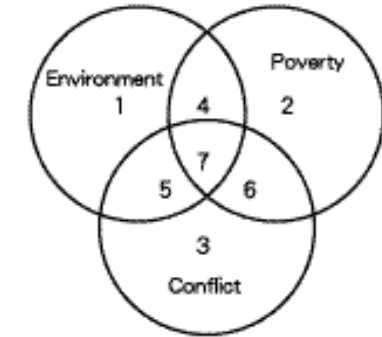
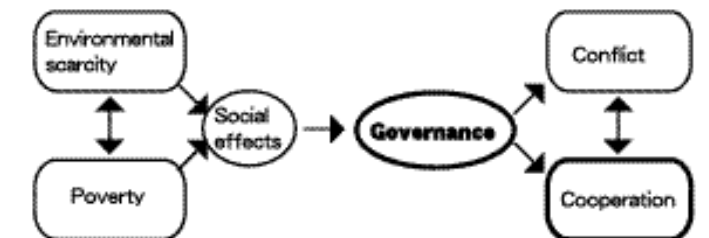


図2-2 社会的努力によって成功へ導く



図2-3 ガバナンスを介在させる



出所：
(上3点) <http://www.prio.no/publications/reports/epc/>などから
(図1)『世界：臨界点 新世界を読むキーワード』第53号(1989年7月)77頁

貧困と紛争

さて、そこで最初の五千万人もなくなった人々の話に戻ります。いくつか図を用意して参りました。御覧になって、貧困と、環境と五千万人も犠牲者との関係をお考えになって下さい。

これにくわえて、最近のPRIO(Peace Research Institute in Oslo)などでは、悪化する環境・貧困・紛争とかかわりのあることを主張しはじめています。上の3枚の図を参照してください。

ガバナンス

ここでいうガバナンスとは何か。2つあります。2つとも、IMFや世界銀行がお金を貸すときに言い出したいいわゆるコンディショナリティ（ひらたくいってみれば、企業や政府、社会のマネージメントがしっかりしているということ）とも、少し違います。

社会を運営するには3つの主体があるといわれています。マーケットメカニズムに基づく企業、決定的な情報は価格です。つぎに、ガバメントメカニズムです。地方では地方自治体、中央では国の政府です。これの決定的要素は、構成員の投票・選挙です。最後が、ボランティアメカニズムあるいは非営利性に基づくNPOです。この資源は、労働力であれ、知恵であれ、お金であれ、現物であれ、寄付行為です。

そして、この3者は、その目標設定（意志・欲望の配分）も資源配分（人、もの、金、情報の生産への配分）も違います。理念もおおいに異なります。もっとも厄介なのは、意志決定の仕方が異なることです。ところが上のような問題がでてきたときに、今やこの3者が協力して問題を解決せざるをえないのです。第四世代の参加型社会開発です。そうすると、これだけ相異なるものが集まってきたら、そこに何か、まとめあげる仕組みや役割を担う人が必要になります。それを総称して、この場合のガバナンスといえます。

NVCはBHN中心で

私の考えは、NVCはまだ第2世代のBHNを中心に行こうというものです。外発か内発かにはあまり悩まないことにします。第二世代という言葉にはもう一つ意味があります。これまでは相当我慢してNVCの自立を考えてきました。もう大丈夫でしょう。自治体とも協力しましょう。呑まれることはありません。企業や他の団体さらには、国際組織とも協力してみま

しょう。これが第二世代に入る意味です。最後にもちろん、若い人々にどんどん責任ある仕事をやってもらう。これも第二世代に入ったNVCの証左です。

BHNが整えば、相当の数の紛争が食い止められます。相当の数の受益者ができます。日本は、外科的手術外交、あるいはアメリカという乱暴な外科医を補助する治療看護外交に手を染めるべきではない。健康予防外交こそ日本の生きる道だと思います。百歩譲って、せめて迷医アメリカが失敗した手術のあとのリハビリ外交でしよう。地球人の一員としてNVCは、独自に仕事をする以外にも健康予防外交には乗ってみましょう。

むろん国家との関係は厄介です。国家がやりたくてもやれない状況下で、国家に代わってやるならば、「国家中心主義者」たちも満足でしょう。しかし、逆に「せっかくあそこまでおいつめたのに余計なことをしやがる」というケースの方が多いのではないでしょうか。ここには、すでに視座の相違があります。歴史観、社会観、人間観・人生観を含めた視座の相違があります。

RAND CorporationのDaniel L. BymannがIISS（国際戦略研究所）の雑誌Survivalに掲載した"Uncertain Partners:NGOs and the Military"と題された論文を読んだときのことで。ソマリア、ハイチ、ルワンダ、ザイル、ボスニア-ヘルツェゴヴィナ、コソボなど「こうした作戦で、アメリカ及びその同盟国の軍隊、国連の諸機関とさまざまなNGOが戦争と貧弱なガバナンスのために引き起こされた痛みを和らげようと協働した。しかし、これほど山のような経験にも関わらず、軍隊は救援機関が有する技術と能力を利用するのに失敗し続けている。その結果、作戦は常に、無用な混乱をもたらす。この混乱が、時と努力の無駄使いに終われば上々である。最悪の場合にはそのコストは命と痛みではかられる。（中略）出来損

ない計画と協力とは、軍隊と救援機関両者ともに押された烙印である。士官達はさまざまなNGOの能力を知らない。かれらがもっている衛生設備、水の浄化方法、その他の必要不可欠な知識を無視する。100をこえるNGOは、活動的ではあるが、現地の国際共同体、別の言い方をすれば、お互いの活動と存在をきちんとしらされていない。」したがって、不可欠な水浄化装置が必要なときに優先順位の低いものが運ばれてきたりして、空港や輸送機の使い方がデタラメになる。「毎日毎日数千人が清潔な水と適切な衛生設備の欠如の結果、命を落としていく。」(Survival, vol.43 no.2, Summer 2001, pp.97-114.)

NGOは市民の組織の代表です。軍隊は国家組織の中核です。その両者の間では、えてして上のようなことが現場では起こるのです。きわめて象徴的な現代社会の姿だと私は思っています。もうひとつ、WTOは、NGOにAccountabilityを求める優れた論文を発表しています。興味のある方はすべてインターネット上でとれますのでお読みなって何かの機会に学習会でも開いて、みなさんに詳しい内容をお知らせしたらよいかと思えます。

講演のお供に

最後にいくつかこれまでもみなさんに紹介してきた言葉や数字を引用します。これからみなさんが講演など行うときは是非言及してみてください。

「アメリカの中学校の先生が、こんな内容のメールを自分が教えた生徒たちに流した。（中略）世界を100人の村に縮小するとどうなるか。その村には『57人のアジア人、21人のヨーロッパ人、14人の南北アメリカ人、8人のアフリカ人がいます。70人が有色人種で、30人が白人。70人がキリスト教以外の人で、30人がキリスト教』に始まってこう続く。『(中略)6人が全世界の富の59%を所有し、その6人ともがアメリカ国籍。80人は標準以下の居住環境に住み、50人は栄養失調に苦しみ、1人が瀕死(ひんし)の状態にあり、1人はいま、生まれようとしています』さらに『1人(そうたった1人)は大学の教育を受け、そしてたった1人だけがコンピューターを所有しています』と続く。そのうえで『自分と違う人を理解すること、そのための教育がいかに必要か』を説く。(中略)こうやって考えてみることの重要さはよくわかる。世界一豊かな国で教えることの意義も大きいと思う。先生はまた『もし冷蔵庫に食料があり、着る服があり、頭の上に屋根があり、寝る場所があるのなら、あなたは世界の75%の人たちより恵まれています』といった解説を加えていく。(中略)その村にいる2人の日本人としても他の98人のことに無関

心ではいられない」(「天声人語」『朝日新聞』、2001年10月27日、1面)。これは、恥ずかしながら、私がすでに1980年に博士課程の学生時代に書いた『図解政治学』という教科書(渋谷武・片岡寛光編著『図解政治学』、立花書房、1981年、113頁)に引用し、もうすでに1975年に翻訳が出版されていた『地球企業の脅威』(ダイヤモンド社)と題するR. J. バーネット、R. E. ミューラーの共著(原著は、Richard J. Barnet, Ronald E. Muller, Global Reach: The Power of the Multinational Corporations (Simon & Schuster Trade Paperbacks, January 1975)からのほとんどパクリです。R. J. バーネット、R. E. ミューラーが約30年前に描写した世界と比べてどこがどれだけよくなったかどうかと落胆します。

もうひとつ、福田君が数年前に世界銀行のHPから私に紹介してくれた『貧者の声』(Voice of the Poor)と題された世界銀行の調査報告書があります。世界銀行はこれまで、『世界開発報告』(World Bank, World Development Report)というどちらかというところ、数値データ主義の経済、とりわけ各国の経済構造、金融、開発や貧困に関する一般的な国家単位の経済指標を中心とする年鑑を発行し続けてきました。最近では、毎年CD付きの翻訳版が出版されています。たとえば、現在この地球上には、1日1ドル以下で暮らす人びとが、5人に1人、約12億人であるというようなデータは、この『世界開発報告』からでてきます。横道にそれますが、この「1ドル」は、購買力平価ではかられているので、外国為替交換レートとは関係なく、物価を考慮して、各地で同じ品物が買えるお金の「実力」にてらして、はかられています。したがって、日本で、百円前後で1日暮らすというのと同じことです。今の日本で、そんなことができるでしょうか。

それはさておき、このような数値データとは異なり、今回のVoice of the Poorは、徹底したインタビュー調査のデータ集です。貧困とは何かを「貧者」に語ってもらう調査にほかなりません。ある意味ではこれほど人をばかにした間の抜けた調査はないでしょう。スラムなどに入り込んで貧しい人々に「貧困とはなんですか」ときくのです。事実、「うちをみれば分かるだろう。屋根は穴だらけだし、壁にも穴が開いている。これが貧困だ」さっさと帰ってくれといわんばかりの回答を得る場合も多くあったと報告されています。当然といえば当然ですね。

調査は、90年代を通じて最貧国47ヶ国で行われ、その結果の一部が福田君のいう通り、ネット上でも数百頁のドキュメントとして公開されています。いくつか紹介してみましよう。これは、「いきいきワイド」

表1 資源配分と成果配分には3つのシステム

目標設定 → 資源配分 → 成果配分

mechanism	交換	行動主体	要素 原理
market	市場交換	企業	価格 競争
government	政府交換	地方自治体、国	投票 多数決
volunteer	相互扶助的交換	NPO	寄付* 互助互惠互酬

それぞれ、目標も、意志決定も異なる→
集団的意志決定の中で部分的にしか関与できない→
ガバナンスという概念が必要になる

(大西隆・高橋潤二郎『PRレビュー』V4N1「座談会：21世紀の地域経営に向けて」p.7参照)

でも各地の講演でも紹介させてもらいましたので覚えている方も多いと思います。

- 貧困とは、家に帰って子どもが飢えるのを見ることだ。彼らに食べさせるものが何もなくて。(ブラジル、95年)」

- 産科病棟に子どもを置いていくケースが増加している。調査員が耳にしたのは子どもが多数売られていることだ。相場は五百ドル。トビリシ中央駅で目撃した若い母親は、子どもを売ろうとして通行人にいった。『この子は飢え死にしようとしている。お金はいらないからとにかく誰か連れて行って』。(グルジア、97年)」

- 農業省の役人がトウモロコシの種を配給した。植える代わりに食べてしまった。それ以外に食べるものがなかったからだ。皮肉なことに、その後借金して種を買った。(フィリピン、99年)」

- 朝、学校へ行くとき、朝食はなかった。昼、昼食はぬいた。夕、ほんの少し夕食があったがとても足りない。他の子どもが食べているとき、その子をじっと見つめる。その子が何もくれなければ私はきっと飢えて死んでしまうという思いで。(10才、ガボン、97年)」

- 彼女はしばしばどちらか食べるか決めなければならなかった。彼女が、息子が。(ウクライナ、96年)」

- 今朝なくなったこの子を例に取る。この子は麻疹でなくなった。病院に連れていけばこの子の命は助かったことはみんな知っている。この子の両親はお金がなかった。だからこの子は、ゆっくりと苦しみながら死んだ。麻疹で死んだのではなく、貧困のために死んだのだ。(ガーナ、95年)」

次に今年の新年会でご紹介したデータです。御出席の方は御存じです。

世界食料計画(WFP)の報告では、世界には、栄養不良に悩む人々が8億人います。60億人しかいない人類のうちの8億人もいるんです。一日24,000人が餓えが原因で命を落としています。単純計算では、3.6秒に一人、そのうち約7秒に1人、5歳以下の子どもが食べ物がないで命が消えている。約4秒に1人、大人がこの世に恨みと未練を残しながら空腹のまま朦朧として、命を失っています。

日本では、年間に家庭で食べずに捨てられる食料は、900万トンです。同様に、コンビニ・スーパーでは700万トンです。この数字はおそらく多くの日本人にとって、全くピンとこないと思われます。世界で、飢えに苦しむ人々、食料が不足している地域に支援を展開している国際組織は数多いのですが、国連に所属する機関でもっとも専門にしているのはおそらく世界食料農業機構(FAO: Food and Agricultural Organisation)と、前述の世界食料計画(WFP:

World Food Programme)の二つの機構でしょう。

誤解を恐れずにまとめれば、前者は、食料統計や作物の研究などに強みを発揮し、後者は、難民などの発生に対して緊急援助で、現場で活躍しています。この後者のWFPが、2000年一年間で行った食料援助は、350万トンで受益者は8,300万人でした。日本は世界一の食料輸入国です。輸入した食料は食べるためではなく、捨てるために存在しているといっても過言ではありません。日本で収穫できないバナナ。FAOの統計では、98万3千mt輸入して16万7千mtすてている。20本に3本を優に超える数です。グレープフルーツ。35万8千mt輸入して、3万9千mtは、wasteの項目に入っています。10個に1個の勘定です。

それにしても、家庭とコンビニ・スーパーだけで1600万トン捨てる国があり、かたや、WFPは、350万トンで8300万人の命を救う。単純計算が許されるなら、日本の家庭とコンビニ・スーパーだけで、約3億8000万人分の受益者を生み出せる。逆に考えてもよい。極東の小さな島国は、札束にものをいわせて、食料を買い占め、食べずに捨てて、3億8000万人餓死させている。

さしもの農水省(当時)も『平成十二年度食料・農業・農村の動向に関する年次報告』の中で、「全国一千万世帯における食品ロス率は7.7%となっている。これを世帯構成別にみると、3人以上世帯において、高齢者がいない世帯では食品の廃棄が多くロス率が高く(9.3%)となっているのに対し、高齢者がいる世帯ではロス率が比較的低い(6.5%)などの特徴がみられる。また、外食の場におけるロス率は5.1%となっており、これを業種・形態別にみると、『結婚披露宴』(23.9%)、『宴会』(15.7%)、『旅館・その他の宿泊所等』(7.2%)等においてロス率が高くなっている。」と、嘆いているのか警告を発しているのかわからない文章を登場させました。

いずれにしても世界一食料を輸入して世界一食べずに捨てていて、しかも、同じ地球の上で、全く同時代に8億もの人々が餓えていることを、世界最高に近い大学進学率を誇る国の民が知らない事実は厳然としています。世界は食料は十分足りているのに人は餓死していくという事実も知られていません。現在の穀物総生産量は、世界全体で、18.7億トンもあります。全人類に必要なのは、9億トンに過ぎないんです。家畜の飼料に6.6億トン使われます。それでも3億トンはあまる。

まず人間が生命を維持するには、食料、水、空気がいります。

私は、十年ほど前から21世紀の人類最大の課題は「水」であると考え、そう述べてきました。国際科学

会議の環境問題科学委員会は、国連環境計画のために、50か国、200名の科学者を対象に21世紀にもっとも注意すべき環境問題について調査を行いました。その結果、1位は、気候変動、2、3、4位は、淡水資源の枯渇、森林破壊と砂漠化、淡水の水質汚濁となっています。30項目あまり発表された中には、海洋汚染、漁業の衰退、海洋循環、沿岸域の環境悪化、エルニーニョ、海面上昇など水に関連の深い項目がもっとも多く見られたのです。

少し古いですが、TIME誌の1996年10月28日号は、海洋大特集を組んでいます。そこにThe World Conservation Unionから引用された「紺碧の危機」と題する世界地図を見ると、アジアー帯のサンゴ礁は早くも10~20年遅くも40年で絶滅するとあります(pp.48-49)。また、余談になりますが、この地図には、日本列島の両サイドに一つずつ核廃棄物のマークがついているんですよ。推定するに、一つはロシアの原子力潜水艦、もう一つはアメリカ海軍が誤って落としてしまった核ミサイルでしょう。

人類の水瓶は一定量が決まっています。それを増大する人口と増大する一人当たり個人消費が危機に陥れてきた結果にほかなりません。さらに、日本は、棚田という絶好の水瓶を失いつつある。人類が使う水の7割は農業用です。穀物1トンの生産に水1千トンがいる。「消えるコロラド川」の話はあまりにも有名でしょう。アメリカ合衆国を流れてきた堂々たるコロラド川がメキシコとの国境を越えたとたんにちよろちよろした流れになってしまう。国境手前でアメリカが農業用にほとんど取水してしまうからです。家畜を1キロ太らせるためには、牛8キロ、豚4キロ、鶏2キロの穀物資料が必要とされます。その穀物を1キロ作るのに水は1トン必要なのです。

先進国型生活様式をかえないならば2025年には人類の3人に2人は、基本的な水の需要を満たせずに水ストレスに陥るという予測がでています(「世界水ビジョン」)。このことは、UNEPのPACHAMAMAというKids向けのwebページにも記載があり、さらに、現在世界では、12億人の人々が汚染された水で生活を余儀なくされ、それが、毎年1500万人の5歳以下の子どもの死に影響しているし、たとえば、アジアでは、3人に1人は安全な飲料水へのアクセスをもらえず子どもたちに説明しています。HPを御覧になったらよいかと思います。

こうした未来を回避するには、先進国のライフスタイル(消費)を今の十分の一の水準に引き下げねばならないという警告もでていきます。監視も罰則もなしでそんなことができるでしょうか。そこにこそ、人類の連帯や、他者を思う心がとられるのでしょう。

こうした飢餓や、水争いはもちろん武力紛争の原因にもなっています。武力の敷居を超える前の手当てが必要で、「PKO協力法の付則第二条」の廃棄に対する抵抗は、もし大規模なものが組織し得て成功していたら日本の最大の国際貢献たり得たかもしれません。1945年の敗戦以来、半世紀以上、戦場と認められる地域で、戦闘行為によって、日本軍の兵士に殺された人間は、この地球上にたった1人もいないのです。現在の地球人口は60億です。戦争が原因で命を落とした人は、半世紀で5千万人をこえた。その中に日本兵によってその命を人生の途上で奪われた者は、ただの1人もいないのです。

国会を通過したテロ対策特別法、PKO協力法の付則第二条、すなわち同法の第三条第三号イからへに記載されたいわゆるPKO本隊業務を凍結した条項の廃棄がもたらす結果には、その敷居を越える可能性があります。『朝日新聞』のレバノン駐留PKO軍に対する取材では、任務にあたって、殺してもいいし、殺された経験もない部隊は、皆無だそうです。「武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」(日本国憲法第9条第1項)国の国民のままにいたいと「理想主義者」の私は真剣に思っています。

少なからずNVCには、これができます。紛争をもたらしたり拡大するよりもそれを予防する方に役に立っていると、信じ、常にチェックを怠らずに進みたいと思います。いつもの言葉で締めくくります。

Ask not which country you can do for,
Ask what you can do for the Earth.

おっと、これはJFKのもじりです。

Do not think you can do everything.
Do not think you can do nothing.
Do think you can do something, for the others in your life.
The sooner you find that something, the better the world will be.(TH)

「何から何までできると思いあがるな」
「だからといって何もできないと最初から諦めるな」
「生涯を通じて世間のために何か役にたつことができると思いたまえ」
「その何かを見つけるのが早ければ早いほど、この世界は良くなっていく」

長くなりました。来年4月に次の方に引き継ぐまでくれぐれも協力をよろしく願いいたします。

2002年度総会レポート

2002年度NVC総会が、4月7日(日)新潟市総合福祉会館で開かれました。出席者33名、委任状45名で総会は成立。議長に進直一郎委員を選出、議事記録に谷田英、吉田あすか、議事録署名人に藤崎千代子、前野春樹が任命されました。さっそく議事にはいり、国際事業2001年度報告・2002年度活動計画(案)国内事業2001年度報告・2002年度活動計画(案)2001年度決算報告、監査報告、2002年度予算(案)が議案書通り一括報告、提案され承認可決されました。

役員は、2001年度とほとんどかわりはありませんが、事務局長は事情により嶋田真千代さんが退任され、谷口良さんに替わりました。副事務局長に前野春樹さん、バザー実行委員長に谷田英さん、嶋田真千代さん・藤井由美子さん・滝沢勇人さんが運営委員からアドバイザーに、運営委員は西片委員が辞退し、峯村康明さんと安田智子さんが加わりました。これからも皆様のご協力をよろしくお願いします。



2001年度の事業報告と2002年度の事業計画です。

2001年度

2002年度

スタディツアー

マダガスカル 8/24~9/3
25名参加。植林・土壌浸食防止ボランティア
ベトナム 9/4~12
13名参加。開校式参加、施設の視察など

ベトナムを中心として行う。日程は未定

ラオス

JVCラオスと共同で、ナトン村、ファイホック村においてにおいて浅井戸と導水施設の設置工事をした。導水施設の完成は4~5月の予定。

JVCラオスの評価会議の結果を受けて2001年度同様にプロジェクトに取り組む。

旧ユーゴ

情報交換を継続。

引き続き情報交換の継続。

ベトナム

VFP25 ホーチミン市12区アンフードン村に小学校建設
VFP26 フェ市ピンタイン村に小学校建設。巻町在住の河合正敏氏ご夫婦と友人の寄付。
VFP27 NVC奨学金2001 6名に授与
VFP28 連合奨学金2001 17名に授与連合新潟からの寄付による。
VFP29 皆川奨学金2001 20名に授与皆川三好様のご寄付による。
VFP30 大学婦人協会新潟支部奨学金1名に1万円を授与。
VFP31 キークワン寺2001
ホーチミン市ゴバップ地区の盲人の子供たち35名を支援する。
マイアムピンミン(WOCA運営孤児院)支援

VFP32 小学校建設
ホーチミン市9区ロンピン地区に4教室を建設するプロジェクトに取り組む。
VFP33 NVC奨学金2002
SACと協力し、18名に総額18万円を授与。
VFP34 連合奨学金2002
SACと協力し、17名に総額17万円を授与。
VFP35 皆川奨学金2002
SACと協力し、20名に授与。女子学生優先。
VFP36 大学婦人協会新潟支部奨学金
SACと協力し、女子学生2名に総額2万円授与。
VFP37 キークワン寺2002
キークワン寺に住む子供たちの支援

2001年度

2002年度

ベトナム(続)

VEP109 メコンデルタ洪水支援
ボート50艘等支援
VMP2 小学校建設
メコンデルタのドンタップ省カオライン地区に2教室増築。滝沢勇人会員が発起人となり、東北電力での募金活動で行う。
VMP3 小学校建設
ベトナム中部のクアンチ省チウフォン地区に4教室増築。VMP2と同じ。

絵手紙交換プロジェクト
今後も継続していく。

バングラデシュ

教育プロジェクトの充実 実際の支援は2000年7月15日、01年8月30日に02年3月までの費用として2000ドル送付。
井戸水ヒ素汚染問題について勉強会をした。

教育プロジェクトの継続充実。
ヒ素問題解決への進捗状況を勉強していく。
緊急支援を行った母子家庭の手工芸訓練援助

東アフリカ

マダガスカルで「土壌浸食防止植林ボランティア」として労力提供

スタディツアー実施
(16ページのHot Newsをご覧ください。)

謄写版

プロジェクト自体の見直し

方向性を模索し、検討していく。

新潟県内 元カクオ スの子支援

自主スタディツアー後、愛のかけ橋バザーで報告会の場を設けるなどのかたちで支援した。

CCC(子ども文化センター)の事業計画に合わせて交流に取り組む。NVCは同プロジェクトの趣旨に賛同し可能な範囲で支援していく。

NVC愛の かけ橋バザー

10/13,14日、新潟中郵便局3Fで開催。売上金と寄付金の合計が2,757,331円だった。

10/19,20日新潟中郵便局3Fで開催する。
会場設営・値付けなど事前作業は10/15~。

地域区講座

第26回「NPOスタッフの日米比較」7/15
講師：大出恭子氏(JUCEE)
第27回「バングラデシュの地下水のヒ素問題」9/17
講師：板東和郎氏
第28回「新潟大学国際ボランティアサークルスタディツアー報告」10/17
第29回「マダガスカル植林の現況」10/27
講師：仲村正彦氏(JICA)

必要に応じて講師をお招きし、3回以上講座を開きたい。

機関紙・出版

「かけ橋」「もう一つのかけ橋」の発行。
2002年度はNVCライブラリーの出版も予定。

様々な質問が活発に出されましたが、その中で、これからNVCはどういった方向に進めていけば良いのかという問いかけがあり、会場からは「これからは若い人たちの活動が将来のNVCの活動に結びついていくと思うので、若い世代に参加をしてもらうためのPRや方法を考えていくことも大切。若い人たちにスタディツアーにもっと参加してもらいたい。現地に行くことによって自分が何をすれば良いのか考えるのではないか。」といった声が聞かれました。

また、要望として、NVCの会員の中には様々な得意分野を持っている人が沢山いるが、そうしたノウハウを上手に活用するために、専門分野別の名簿が欲しいという声があり、今後検討していくことになりました。



ベトナム未来プロジェクトの これまでとこれから

ベトナム留学中の福田忠広運営委員が、2002年総会に
合わせて帰国。現地の様子を伝えてくれました。

ベトナム未来プロジェクトとは、教育を通じて、
ベトナム社会の発展に貢献することを目的としたプ
ロジェクトです。

1995年から、このベトナム未来プロジェクト
(VFP)が開始されました。今年で8年目を迎え、
これまで以下のような事業が行われてきました。

- 小学校建設プロジェクト
- 奨学金プロジェクト
- 孤児院支援プロジェクト
- ベトナムミニプロジェクト

これから、映像を交えて順を追ってご紹介してい
きます。

小学校建設プロジェクト

小学校が不足している地域に小学校を建設し、児
童に教育機会を提供することを目的としているプロ
ジェクトです。児童が安全に通学し、快適な学習環
境を提供してきました。

昼間働かなくてはいけない児童、文字の読み書き
ができない人々に対する識字教育を行っています。



VFP 1
ビンヒンフォア小学校



VFP 2
フッキエン小学校



VFP 3
フックロック小学校



VFP 4
ドンタン小学校
(藤崎学校)



VFP 5
タンニャット小学校



VFP 7
ビンミー小学校



VFP 12
タイミー小学校



VFP 17
ビンフック小学校
(小塚小学校)



VFP 19
ディン小学校

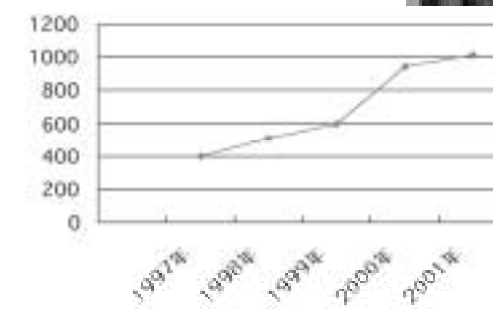


VFP 25
アンフードン小学校



VFP 26
ビンタイン小学校
(河合小学校)

NVCが建設した小学校に通う
児童数の推移



これまでに、3,566人の子供たちが、
NVCのつくった学校で学んでいます。

奨学金プロジェクト



ホーチミン市内で勉強する大学生に奨学金を
授与しています。成績優秀かつ/または財政的
に困難な学生、障害を持っている学生が対象と
なります。

NVCは、ホーチミン市学生援助会と協力して、
1998年から奨学金プロジェクトを開始しまし
た。

現在では、NVC奨学金、連合新潟奨学金、大
学婦人協会新潟支部奨学金、皆川奨学金、の4
つのプログラムがあります。

98年度は8名の学生(35%)に、99年度は
33名の学生(38%)に、00年度は53名の学
生(50%)に、01年度は44名の学生(13%)に
奨学金を授与してきました。今年度以降も継続
されます。

これまでの奨学生の総数：138名

孤児院支援プロジェクト

孤児院の建設、孤児院の運営費の支援を行っ
てきました。教育機会を与えるだけでなく、子
供達が健康で、人間らしい生活を送るための環
境を整備するためのプロジェクトです。

これまで、マイアムパーチュウ、マイアムピン
ミン、キークワン盲学校、社会食堂の支援を行
ってきました。



【マイアムパーチュウ】
マイアムパーチュウは
NVCがWOCAの要請
を受けて開設したも
ので、ベトナムにお
ける孤児院建設の一
つのモデルとされて
います。

現在は、20名の女の子の孤児が生活しています。
運営費は、在ベトナムのニュージーランドのコ
ミュニティーが支援しています。



【社会食堂】

ホーチミン市にある大きな市場の近くの食堂2階に孤児が住み着くようになり、彼らの食費、教育設備費を98～00年度まで支援

してきました。

現在は、スイスのNGOが支援をしていますが、再開発地区に指定され、今年の6月で閉鎖になります。



【マイアムピンミン】

現在、20名の女の子の孤児が生活しています。スイスのNGOが建設し、オーストラリアのNGOが運営費を支援していましたが、00年度で、支援を打ち切りました。他のドナーが見つかるまでの緊急支援です。



【キークワン盲学校】

98年度からキークワン盲学校に住んでいる障害を持った子供達を支援しています。

35名の子供達の食費、教育設備費の援助を行っています。

現在、自立に向けて、農場の運営、雑貨屋とタイアップした雑貨品の製作のための職業訓練などを行っています。



(右：キークワン寺に住む水頭症の子ども)

ベトナムミニプロジェクト

会員、NVC以外の団体が、計画、立案、実行をするプロジェクトです。

これまで、小林伸子会員ら有志が「ベトナムフェスティバル」を開いた収益でキークワン盲学校に洗濯機を送り、瀧澤勇人会員が東北電力の社員に呼び掛け、小学校を建設中です。

(小林伸子会員と有志が送った洗濯機)



(東北電力のボランティア有志が支援し、建設中の小学校)

【ベトナムミニプロジェクトの可能性】

NVCがセンター的な役割を果たし、様々な個人、団体のプロジェクトへのアドバイスをし、緩やかなネットワークを形成していきます。

現在、静岡のクリエイティブ2021が、ベトナムミニプロジェクトを行おうとしています。

ベトナム未来プロジェクトをとりまく環境

ベトナム政府が、小学校の建設に力をいれはじめており、約1000校の小学校建設が予定されています。

これらは主に、世界銀行や各国政府のODAによる小学校建設です。NVCがつくる小学校と比較して建設コストが数倍になる他、規模や場所など、現地のニーズに即しているかが問題です。

ベトナム未来プロジェクトのこれから

活動地域を、ホーチミン市から南部のメコンデルタ、中部地域に移して行きたいと思っています。

洪水が頻発する地域での児童保護センターの建設を視野に入れて行きます。

昨年の洪水で、数十名の幼児が命を落としました。その原因は、両親が不在の際に、水がきて幼児が溺れたためです。

児童保護センターでは、子供を預かり、洪水の時期、幼児の命を守ります。また、同時に教育も行います。

(写真右上から)

- 洪水の様子
- 洪水支援の様子
- 洪水の中でも学校に通う子供たち
- 児童保護センターの中



まとめ

会員の皆さんの活動が、現地に直結しています。

会員の皆さんの会費、バザーに商品を提供して頂いている方、バザーに協力して頂いた方々の活動は、現地での活動に直結しています。



3,566人の児童が通学
138人の大学生に奨学金を授与
265人の子供達の生活支援
未来の受益者達

今後も、国内での事務作業、広報作業が増加すると思われます。現地での作業の増加、スタディーツアーの受け入れの増加も見込まれます。

新潟で生まれて、新潟で育ったきたNVC新潟国際ボランティアセンターがますます発展しますように。

ベトナムの子供達の教育を支えるために、一人でも多くの方々の御参加と、1分でも長いお手伝いをよろしくお願いいたします。

Q & A

Q 現地にいてのNVCとの関わり方と具体的な活動をお聞きしたい。(金子委員)

A 年に数回現地に入りNVCの橋渡しをしたり、奨学生の調査をしたりします。

Q ベトナムの金利は？ 利息だけで何ができないのか？ マイアムパーチウの女の子から手紙が来る。もしできれば文通が可能なのか？長岡の留学生から翻訳してもら

い、翻訳料を留学生に払えないか？(原監事)

A パソコンの許可がいらいます。0.01%で利息は高くはないです。自立の面から見て自己満足になるのではないかと。僕個人としては反対です。文通については、よいことだと思うが自立をいかに助けるかが問題だと思います。NVCとしてどうなのか？

これまで支援した子供の数：265名

NVCと総合的な学習の時間

新教育課程の一環として「総合的な学習の時間」(以下総合学習)が平成14年度より完全実施となりました。NVCにおいても既に、会員が講師として小中学校を訪れたり、中学生の事務局訪問を受け入れるなどの取り組みが始まっています。(NVC2002年度総会資料参照)

今回は、実際に学校でお話をしてきた会員の体験談などを報告したいと思います。

東南アジアと総合的な学習の時間について

馬場 隆史 (運営委員)

「総合的な学習」の時間? 一般の方にはなにやら分かりにくい時間だと思う。これは、本年度辺りからスタートした試みで、教科の枠を越えた「横断的」な学習をするために設けられた時間らしい。そこでNVCの活動が国際理解の役に立つということで私馬場と前野春樹氏が白根市立味方小学校に行きNVCの活動について話をしてきた。

さて、前野氏は、マダガスカルの話をしてきた。私は、東南アジアの話をしてきた。が、よくよく考えてみると、私が東南アジアに行ったのは、5~6年前が最後でそれっきり行ってない。だから、児童の反応は、前野氏のマダガスカルの話の方がよかったような気がする。それでも、児童の反応で印象に残ったことが少しある。

それは、次のようなやりとりだった。

「貧しい国に何か送るとしたら何がいいですか。」(児童)

「何を送ろうと思ってるの?」(馬場)

「う~ん~と、靴とか・・・」(児童)

「そっか。ちょっと考えてみて。もし6月の梅雨

に靴はいてたらどうなる?」

「びしょびしょになる(あちらこちらの児童から)

「実は、みんな知らなかったかもしれないけど、東南アジアは、雨の日が多いんだよ。」

「だから、ひょっとしたら、靴よりもサンダルの方がいいかもしれないよ。」

「そっか。へー。なるほど」(いろいろな児童から)

「だから、もしみんなが何かを送るとしたら、本当に必要なものをよく調べてから送った方が送った相手からも喜ばれるかもしれないよ。」

「ふむ、ふむ、なるほど」(あちらこちらの児童から)

それから、グループごとに分かれて「どうしたら途上国のためになるか、自分たちはなにができるか」といったことを話し合っていた。私は最後に次のようなことを言った。「自分たちにできる

ことは本当に小さいことだけれど、恐らく、何をしたかよりもその気持ちの方が大切なのではないでしょうか。だから、何年経ってもその気持ちを忘れないでください。」と。

帰りに思ったことだけれど、もう一度、東南アジアに思いを寄せてみようかなと。

「総合的な学習の時間」とスタディツアー

前野 春樹 (運営委員)

2ヶ月ほど前のことである。信州の実家から1枚のFAXが送られてきた。地元紙に掲載された小学生の作文だった。

どうやら私の話をもとに書き上げたものがコンクールで入賞したらしい。賞をもらったのは、5年生(現6年生)の児童

だったのだが、まるで自分のことのように嬉しかった。

しかし、それもさることながら、私の伝えたことが予想以上にその児童に理解されていたことのほうが、私にとっては嬉しい限りであった。

NVCのおかげで、昨年度は様々な小・中学校で講演をさせていただいた。今年度も時間の許す

限り関わっていききたいものである。ただ、私が話すことのできる範囲にも当然限界がある。本や人づてに聞いたことでカバーできない部分も出てくる。では、それを補うことはできないのか。いや、そんなことはない。毎年少なくとも1回はスタディツアーが実施されているのではないかと。

多少乱暴な定義かもしれないが、『総合的な学習の時間』の講師の依頼=スタディツアー報告会の一環』と考えてみてはいかがなものか。児童・生徒の前で話す機会というのは、教師でもない限り、なかなかないのである。それに、子どもたちに説明するためには、それなりの準備と情報の整理が必要であろう。言わずもがな、それは自分のためにもなる。

お恥ずかしいことに、かくいう私も毎回万全の体勢で臨んでいるわけではないのだが、自分で理解できていないことはやはり子どもたちにも伝わらないものである。自分自身の経験を振り返ってみても、自分の話に専門用語や文章語が頻発する場合があります。反省することしきりである。

バザーや総会の際に報告会を実施する、従来の方法を否定しているのではない。それに+する形で報告会を行ってみたいかどうかということである。スタディツアーの「ツアー」の部分は、帰国してしまえばそれで完結してしまうが、「スタディ」はむしろ帰ってきてから始まるのではないだろうか。

児童・生徒とNVC

関 洋介 (運営委員)

子どもに会うのは結構好きだし、まあいいか。そのくらいの気持ちで、数えるほどであるがNVCの会員として小中学校にお邪魔させていただいた。正直、自分の話なんてほとんど聞かないか、静かにしているか、どっちなんだらうかと予想していた。

予想以上に、児童・生徒たちは「喰らいついてきた」。私は主に、スタディツアーで訪れたベトナムの話をしてきたのだが、衣食住に質問は始まり、時には「ベトナムでは警察が悪いことをしているって本当ですか」というような、私の知らないことまでよく調べている人もいたりした。近年の青少年犯罪などのニュースばかりが先立ち、子どもたちも総合学習なんて、と適当にやっているのだから、と高をくくっていた私は、安心し



たというより驚いた。食べもののことを執拗に気にする子もいれば、ストリートチルドレンに対して、恵まれなくてかわいそう、という子もいた。

そのような子どもたちに、一体何を材料として提供できたのであろう。思い出してみれば、実感が無いのに体験以外から得た情報を話していたこともあったし、そもそも私が話していた内容は3年近くも前のスタディツアーで見聞きしたことである。あれからベトナムも大きく変化しているだろうし、記憶も鮮明なものではない。第一、自分も変わっていた。

とはいえ、どんな話が子どもたちにとって「良質」なものか、ということは分からない。スタディツアーで見聞きしたことを話すのはもちろんのこと、自分のツアー後の心境の変化などを話すことも有意義であろう。正直なところ、子どもたちには「途上国の子どもはかわいそう」で終わってほしくない、などの想いもある。しかし、私の希望や学校側の意向より、何よりも大事なのは子どもたちが何を感じ、考えるかということであろう。私の考えを押し付けてはいけないのだ。そのような信念に基づき、今後も自分が見聞きし感じたことを話していく機会を持てれば、と考えている。そのためには3年ぶりのスタディツアーに行かないと話のネタがないな、と最近考えているところである。

会員のみなさんへ

このように、新潟という地域での活動として、バザーの他にも皆さんの力を活かす場がたくさんあります。今年度もおそらく、総合的な学習の時間として、NVCといくつかの学校が関係を持つことになると思います。学校教育の場で、NVCとしてご自身の体験を子どもたちに伝えたいという方は、是非NVC事務局までご連絡ください。



総合的な学習の時間を使い、子供たちが世界の国々について調べた。

東アフリカ事業 = ケニア = と 36thスタディツアーのお知らせ

峯村 康明 運営委員

4月7日のNVC総会においても触れました通り、NVCとJICAの共同事業は本年度より「東アフリカ事業」として活動を行ってゆくことになりました。今夏、第36回ツアーとしてケニアツアーを組むこととなりました。

NVCのスタディツアーとしてはマダガスカル以外のアフリカへツアーを組織するのは初めてです。

マダガスカルでは土壌侵食防止の作業が中心でしたが、ケニアでは「社会林業」が一つの大きなテーマとなります。以下、ケニアでの活動とツアーについての概略をお知らせします。

社会林業とは = ツアーの目的 =

ケニアでは国土の乾燥、人口増加、エネルギー資源として薪や炭に頼っていることなどにより森林が減少傾向にあります。このため、ケニア政府では国内の緑化を図り、薪炭林の供給不足等に対応しようとしています。このような家庭燃料、家畜飼料、緑陰確保など住民自身の生活安定や福祉向上のために欠かせない植林、森林管理、利用活動が「社会林業」です。

今回のツアーでは、JICAが現地で行っている「ケニア半乾燥地社会林業普及モデル開発計画（通称、SOFEM Social Forestry Extension Model Development Project for Semi-Arid Areas in Kenya）」に協力すること、また農家の社会条件調査を行い農地林造成に係る農民の基礎データ収集することを目的としています。

旅程

2002年8月16日出発

日本・ケニア間の移動を含めると全日程で12日前後のツアーとなります。詳細は決まり次第御案内しますので、HPなど注意して下さい。

現地での行動日程

- 1日目 ケニア（ナイロビ）到着
オリエンテーション
- 2日目 日本大使館、JICAを表敬訪問
移動（ナイロビ キツイ）
- 3日目 社会林業に関する講義
プロジェクト視察
- 4～6日目 農家での農地林視察及び社会条件調査
- 6日目 移動（ナイロビ キツイ）
- 7,8日目 ミニツアー（予定）
- 9日目 現地の学生との交流会
ケニア（ナイロビ）発

費用

- 24万円程度
- （内訳）移動費；航空券約20万円 + TAX
- 現地での滞在費；2万5千円程度
- その他

なお、今回も人数次第では、特別の事務局を設けます。早稲田の学生に関しては、永井亜矢子さんが担当します。

ここに記載しました内容は、現時点におけるものであり、今後計画を進めていく上で変更が生じる可能性があります。予めご了承下さい。



にいがたNPO情報ネット開設 www.nponiigata.jp

金子 洋二 運営委員

新潟県では、NPOのためのオンライン・コミュニティ、「にいがたNPO情報ネット」を今年1月8日に開設し、運用しています。

オンライン・コミュニティとは、インターネット上で、あたかも実際の「まち」のように、「住民」にあたるサイトの利用者一人一人がコンテンツの作成に関わり、情報を持ち寄りながら互いに育てていく「場」という意味。NPOのための新しいインフラとして活用され、実際の活動にも刺激を与えるものになることが期待されています。

新潟県はこのサイトの開発に際し、昨年8月に企画コンペを開き、約4ヶ月かけて開発を行いました。このサイトの企画・開発および管理には、NVC運営委員の金子が携わっています。

NPOに焦点を絞ったオンライン・コミュニティは今までもありましたし、行政がNPOのための情報サイトを開設する例も初めてではありません。そうした中、この「にいがたNPO情報ネット」の特徴としては以下の点が挙げられます。

あらゆるセクター間の協働を促進するため、NPO（法人格の種類や有無、活動分野は問わない）、企業、行政がそれぞれの立場で参加できる。

団体の登録やプロフィールの更新がいつでもネット上ででき、それらがイベント情報、寄付金募集情報、人材募集情報を公開するページとリンクで結ばれているため、互いに関連づけた情報収集ができる。

従来のオンラインコミュニティが全国を対象としたものが多かったのに対し、このサイトは新潟県内における民間の非営利活動に力点を置いており、活動の場となるコミュニティーに近い細やかな情報の共有ができる。

サイト上での政策提言やイベント情報の県内マスコミ宛一斉送信機能など、従来にはなかったユニークなサービスが充実している。



サイト上でのサービスの他、メールマガジンやメーリングリスト（電子フォーラム）といった複合的な情報媒体が用意されている。メーリングリストについては、希望があれば新たに開設し、自主運営することも可能。

IT（情報技術）の飛躍的な発展の中、市民活動の分野にもその有効活用が求められています。このサイトがNPOにとってITを駆使した新しい社会貢献のインフラとなりうるか？ その答えは、やはり「コミュニティ」である以上、利用するユーザーの手に委ねられていると言えるでしょう。

URLは、http://www.nponiigata.jp です。団体としての登録の他、個人ユーザーとしても登録し、様々なサービスを利用することができます。利用料は無料。ぜひ一度ご覧になって下さい。

お知らせ

掲載情報を募集します！

かけ橋を読者相互の情報共有の場として活用するため、掲載情報を大々的に募集します！国際交流やNPO全般について耳寄りな情報がございましたら、どしどしNVC事務局までお寄せください。

寄稿される場合、文字数は問いませんが紙面の都合で調整させていただく場合もあります。次回「かけ橋20号」は、愛のかけ橋バザー後の11月下旬発行予定です。掲載情報は11月上旬までにお送りください。

リレートーク

NVC's Human Network

水落春雄さん（前回）からバトンタッチ

金子 洋二さん 運営委員（新潟市）

今から15年前、新潟大学の国際関係論ゼミの門を叩いたときから、私の人生は確実に変わった。

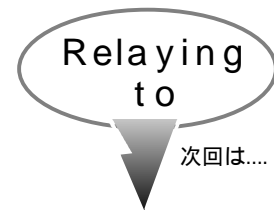
多賀先生は当時まだ30代後半の若き研究者。（でも、既に教授だった）周りの先輩や同級生達はまさに強烈な個性のオンパレード。負けてなるかと勉強をすればするほど、それまで当たり前だと思っていた世の中の仕組みが、実は嘘と矛盾に溢れていることを知ってしまった。これは、19才の若者にはちと刺激が強すぎた。

その結果、友人達があくせく就職活動を始める頃までには、すっかり社会に出る気が失せていた。かといって、何もせずぶらぶらしてられるほど良い身分ではない。

結局、ほとんどくじ引きのようなノリである会社に就職。因みに、当時の就職事情は超売り手市場で、友人達の多くは「一流企業」と呼ばれる所に入った。

それから何度かの転職と十数回の引越を経、今の私がいる。霞が食えるわけではなく、何とか生きてることがありがたくもあり、ちょっと不思議でもある。世の中は相変わらず矛盾だらけだが、生きてるとそう捨てたものでもない。

そろそろ人生の半分を不自由なく生かしていただいたと言えるだろうか。ならば残りの半分は、少しでもそのお礼をせねばならぬなあ、と思う今日この頃である。



その友人達の中でも、「一流企業」に就職しなかった珍しい友人の一人、渡邊順美さんにバトンタッチします。

今でもつい旧姓の「加藤さん」と呼んでしまいましたが、迷える者同士、今後ともよろしく～

峯村康明さん（前回）からバトンタッチ

幾見 泰宗さん 会員（新潟市）

先号で峯村君に紹介され、早稲田の多賀ゼミとしても初めてこの欄を受け持つことになった幾見と申します。NVCのみなさんはあまりご存じないと思われるので、はじめに少し自己紹介をしたいと思います。

私が初めてNVCに出会ったのは一昨年の10月のバザーの時でした。そして、12月、マダガスカルでの活動に参加することをきっかけに入会しました。昨年8月のマダガスカル・ベトナムスタディツアーでは非力ながらも事務局を任せられ、NGOとしての活動を学び、また、個人的にも沢山の経験をさせていただきました。現在は大学を卒業し、故郷の静岡に戻り働いています。

いままで、NVCの活動には所々しか参加しておりませんが、わずかな参加を通して振り返ってみても、様々な能力、個性を

持つ人が同じ目的に向かって活動できる団体で、胸を打たれるものがありました。多賀先生のもとで平和学を学びつつ、ベトナムで子供たちに出会い、マダガスカルで貧しい現状を目の当たりにし、「自分と関係がある」「自分に何が出来るか」「子供たちに未来を」という思いが確かなものになりました。これも、NVCと出会えたおかげです。

最後に、決意表明となりますが、静岡に戻ったので、福田町のクリエイティブ21にも参加しつつ、恩師2人の「アフター5を楽しめ」という言葉を胸に、地元の人と共にNVCに勝るとも劣らないNGOを作りたいと思っています。これからも、NVCの1会員として、また、多賀ゼミ共々よろしくをお願いします。



今回、早稲田の多賀ゼミにバトンが回ってきたので、しばらくこちらの方で回したいと思います。ということで、マダガスカルスタディツアーに連続して参加した友人の峯田史郎さんに次回をおねがいします。

筒井昭仁さん（前回）からバトンタッチ

宮崎 増次さん アドバイザー（五泉市）

もとよりNVCでは一介の「応援団員」でしかなかったが、最近はずっかりJVC同様の「会費会員」になってしまった。そんな私が遠く福岡の筒井さんの記憶の隅に残されていたのがうれしい。

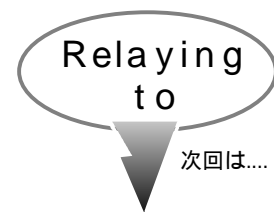
「会費会員」の主たる要因が、私にとって「県議」にあることは疑いないのだが、それを言うと西村さんもそうなのだから理由にならないと思う人がいる。しかし、一口に県議と言っても西村さんのような11名区と、私のような1名区とでは県議をみる地域住民の目に歴然とした違いがある。その結果日常生活に受ける制約にも違いが生じる。それにしても市議時代がうらめしいくらいだ。

そんな不良会員がパレスチナの絶望的な状況に加えて更に打ちのめされている。自爆犯の心象風景である。若かったころテロリストの日常を描いた映画にやり切れない思いをした経験を思い出した。

太平洋戦争で「神風特攻隊」があった。それに近い戦法は他国にもあったそうだが、死ぬ確立百パーセントは「神風」だけだったときく。99パーセントの確立とわずかに1パーセントの差でしかないが、その差には越え難い溝があることを知って驚かされた。誤解を恐れず言うなら、「現代の神風特攻隊」を演じているパレスチナの少年少女の絶望の淵からの叫び越えに太平洋戦争以上の衝撃を受けざるを得ない。

大声を出したものが勝つ世の常。平和主義者は弱々しいしめめしい。そんな風潮がはばをきかず世界の現実。

しかしたとえいかほどにめめしくとも殺しあいを解決する方法は平和主義しかないのだが、それができない、わからない。動物の本能を人はいつまでたっても越えることができない。21世紀を担う君たちよ。この絶望の世紀をどう生き抜くのか、その考えの一端を聞きたい。



その課題を、スタディツアーで一緒だった新潟日報記者の前田有樹さんから聞きたいので、このバトンを君に渡す。

大竹 康子さん（前回）からバトンタッチ

斎藤 恭子さん 運営委員（新潟市）

NVC第1回スタデーツアー

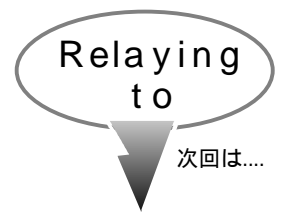
「参加者募集条件 帰国後体験発表の場がある人 参加志望理由を400字程度にまとめ提出 書類選考の結果参加者を決定する」との新聞記事を目にしたのは、1990年の初夏の事。選考の結果不参加者がいたのかどうかは定かではないが、大学生から還暦を迎えた人まで、公務員、団体職員、カメラマン、大学教授、教員、保健婦、主婦、など年齢も職業もまちまち、だが好奇心は人一倍旺盛な人たちから成るツアー参加者。

「赤ん坊を姑に頼んできた」「上司に頼んで頼んでやっと休暇をもらってきた」「NVCがどういう団体なのか、たまたまや

っていたバザー会場まで行って、この目で確かめて来た」などなど皆、各自の問題をクリアしての参加。

今でこそNVCのスタデーツアーも社会的にもその存在を認められ、評価されているが、当時の周りの反応は、「高いお金を払って、何でわざわざ汚いところを見に行くの?」といったものでした。帰国後、1回目のスタデーツアーということで、数種の新聞社が大々的に取り上げてくれ、ラジオ、テレビで、また各種の講演会などで参加者は体験発表の場を持つ事ができた。

体験報告書「国境を越えて遠く」を自主出版し、手分けして販売して完売。残念ながら在庫無し。



今回は小池上綾子さんをお願いします。

NVC育ての親。この人なくして今のNVCは存在しないといってもいい。あの華奢な体の何処にと思うほどのパワーとアイデアの持ち主。

事務局 だより

「第14回愛のかけ橋バザー」のお知らせ

今年もNVCの一大事業である「第14回愛のかけ橋バザー」を下記のとおり実施します。厳しい状況ではありますが、会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。バザー商品の提供、値付け作業、売り子等、できるところでのご協力をお願いいたします。

期日 02年10月19日(土)・20日(日)

会場 新潟中郵便局 3階体育館

なお、値付け作業は10月15日から同体育館で行います。

第32回NVC地球を知る講座「パレスチナ緊急報告会」のお知らせ

パレスチナ情勢は極度に緊迫しています。イスラエルの軍事進攻、自治区占拠によって、パレスチナ人の移動は極端に制限され、戦闘による負傷者や緊急患者の救急車による搬送さえも困難を極めています。JVC(日本国際ボランティアセンター)は人道的見地から、傷病者の救急搬送に同伴するため、緊急に日本から医師および保健婦を派遣し、パレスチナ、イスラエル、アメリカのNGOと協力して現地支援を行っています。

NVCでは、JVCの緊急支援要請を受け、下記のとおりパレスチナの現状を知るため「地球を知る講座」を開催します。帰国直後の佐藤真希氏(JVCパレスチナ事務所代表)を講師に、緊急報告をしてまいりますので、是非、ご参加下さい。

記

- 1 日程 平成14年6月8日(土) 13:30～15:30
- 2 講師 佐藤真紀氏(JVCパレスチナ事務所代表)
- 3 会場 新潟市総合福祉会館401号室
(新潟市八千代1丁目3番1号 025-248-7161)
- 4 参加費 無料(参加に当たって、事前の連絡は必要ありません。)

会費納入のお願い

新年度になりました。NVCの運営および事業資金として生かされる会費の納入をよろしくお願いいたします。

- (年額) 個人会員: 1口 12,000円以上 (高校生以下は無料です。)
夫婦/家族会員: 1口 20,000円以上
大学生: 1口 3,000円以上
団体会員: 1口 10,000円以上
- (振込先) 郵便振替口座番号 00660-2-21594 加入者名 NVC事務局

*NVCのホームページ(<http://www.nvcjapan.org>)が、とっても見やすくリニューアルされました。ぜひご覧下さい!